

次世代智民の展望、日本の場合(2)

スマートモブズの創発性の評価

公文俊平 (GLOCOM所長) 東浩紀 (GLOCOM主任研究員) ●インタビュー／石橋啓一郎 (GLOCOM研究員)

2

石橋 前回(『智場』9月号)は智民発達史の話の流れを受けて、日本のコンテンツ産業の状況やオタクの役割と智民の関係についてうかがいました。今回は、8月末に公文所長・会津泉主幹研究員の監訳で出版されたハワード・ラインゴールド氏の著書『スマートモブズ』に関連して、ちょっと違う話をうかがってみたいと思います。前回までの話では、ギークの次はスマートモブズになるのではないか、ということでした。しかし、本を読む限りでは、ギーク、オタク、スマートモブズというのは、全く層が違うような感じがします。

一方、日本でも2ちゃんねるの突発オフという現象があります。白装束の軍団が出ると、みんなで黒装束で見物に行こうとか、「マトリックス」の公開に合わせてマトリックスの登場人物の格好をしてみんなで集まってイベントをやろうとかいう呼びかけをすると、あっという間に人が集まったりします。この行動だけ見るとスマートモブズの片鱗のようなものが見える。これを見ていると、日本でもオタクとスマートモブズというのはつながっているようにも見え、評価に苦しんでいるところ。日本では、次にスマートモブズ的なものが来ると思いませんか。

東 いや、次というより、現に来ていると考えるべきです。2ちゃんねるには「スマートモブズ」的な現象がある。ただ、二つの問題を分けなければいけない。「従来の市民の延長線上にオタクとかスマートモブズがあるのですか。彼らがそれにとって代わるのですか」と言うのと、僕は否だと思えます。しかし、「いま社会の中心で動いている人たちにオタク現象やスマートモブズ現象があるのですか」と言うと、これは肯定なわけです。従来の市民的公共性の延長上には彼らの動きはない。けれどもそれが、社会現象の多くのところで重要なことになっ

てしまっている、という問題だと思います。

公文 いや、そもそも多くの変化は延長上に起こるものではない。そういうものもあるかもしれないけれど、多くはそれぞれ相転移で異質のものが出現してくる。しかし、後からまた見なおしてみると、大きくはつながっているという見方もできる。それでも、少なくともマイクロに見たときには全く別物だと思うでしょう。

■スマートモブズは一般化するか

石橋 スマートモブズ的なものというのは、比較的一般の人に受け入れられやすいような性質を持っていて、現に受け入れられています。たとえばスマートモブズの一番プリミティブな形は、携帯メールで友達の間でジョークのメールがすごい勢いで流れていくといったようなことが素地になっていて、そういうメディアを使いこなしていった先にあるのではないかと、私は考えています。そういう意味では、日本の一般利用者には素地ができてきているような気がします。初期段階の智民は、高い学歴を持っている一部の人以上にはなれなかったのに比べ、スマートモブズ的な智民はすごく一般に受け入れられるものであると考えられます。こういう認識はお二人も共通にお持ちかどうかをうかがいたいのですが。

東 スマートモブズが一般化することですか。

石橋 単純に言えば。

公文 中心になる動きを示している層が、少数からだんだん多数になっていき、高学歴から必ずしも学歴を問わなくなっているとか、専門家から専門的知識を持たな

い人になってきている。

石橋 スマートモブズは、そういう新しい主流が形成されているというよりは、一般の人びとがそういう動きに移行する素地を持っているのではないかと、私は考えているのですが。

公文 これまでの住民には、典型はテクノクラートでしょうが、それ以外の人びとと非常にはっきりした階層性、レイヤーの違いがある。ギークになると、社会的なレイヤーの違いは言いにくくなっていく、あるいは逆転したという部分があるのだが、スマートモブズのような存在になると、特別なレイヤーも何もない。その先は僕にはわからないけれど、そうなったときに個体として、“コネクター”とでも呼べるような豊富な人脈を持ってリーダーシップを発揮するようなある種の中心的存在、アジテーターになるような存在があって、そこにある種の構造が生まれると考えるのか、それさえないのか。

東 僕はスマートモブズ化を、そういうふうにはとらえていないのですが。

石橋 まだ、そんなに大きく変わっていないというのは共通認識ではないですか。

東 スマートモブズ的現象は、確かに一般的になるでしょう。たとえば、人々がみな携帯電話を持っていれば、待ち合わせの方法や情報の集め方は大きく変わるでしょうが、それで友達がすごく増えるわけでもないでしょう。何と言いますか……。スマートモブズ化は、情報技術の大衆化ととらえていいのでしょうか。

公文 単なる大衆化だけではない。それこそ、ラインゴルド流にいうと「人々の協力を組織するための技術が、これまでと異質のものになってきている」。

東 それはわかります。ただ、それを使いこなしてクリエイティブなことができる人というのは、限られているのではないのでしょうか。

■ 創発性の出現

公文 そこは重要な点です。そういう種類の話なのか、それともスマートモブズにおけるクリエイティブ性とは個のクリエイティブの問題ではなくて、集団行動のレベルでのクリエイティブ性、あるいは集団のインテリジェンスなのか。

東 今までなかったようなタイプの創造性、たとえば、1回もメンバーが顔を合わせない集団作業などは可能になるでしょう。そういう意味で集団的な創造性が発揮しやすくはなるだろうけれど、大衆がみな能動的存在になるとは、あまり思えません。

公文 たとえばフィリピンのエストラダ政権打倒にスマートモブズが一役買ったという話で、100万人がデモに参加して何かをやったというときに、はっきりしたリーダーがいたわけでも、どこかの政党が引っ張っていたわけでもない。むしろ全体としてのスウォーム(群がり)というか、群衆的主体ができていて、その内部が全く同質ということはないだろうから、いろいろな役割分担はあるだろうけれど、その中のどこかにあるセンターが指令を出しているようなことではないし、誰か特定の個人のクリエイティブなアイデアやビジョンに基づいて何かを作ろうとしているのでも必ずしもない。全体を動かしているのは、もっと茫漠とした何かではないのか。あるいは各人は、直接には身のまわりのちょっとした不満に反応しようとしているだけかもしれないし、ちょっとしたおもしろいことをやろうとしているだけかもしれない。そうしたローカルな行動が“スマートモブ技術”を通じて非常に速く伝播し相互作用し合って、何かがグローバルにイマージ(出現・創発)してくる、つまり別

の大きな秩序が出てくる、という種類のものではないでしょうか。

東 それは感覚的にはよくわかりますが、肯定的側面だけでもないでしょう。たとえば日本で最近報道された例として、オールスターゲームのファン投票への集団投票がありましたね。ネットで「こいつに投票しよう」と冗談まじりの書き込みがあって、それに同調する匿名の大衆＝モブが動いた結果、実績のない投手に莫大な組織票が集まって1位になってしまった。これはこれでスマートモブズ的現象ですね。だとすると、スマートモブズの現象は、政権打倒の局面でも働くかもしれないけれど、単にオールスターの投票を茶化すためにも働くわけで、そこでラインゴルドは前者の例を出したということですよ。それはジャーナリストの作るストーリーとして美しいと思いますが、新しい社会の原理として一般化できるものとはとても思えない。むしろ、スマートモブズ化の果てに見えてくるのは、危険なポピュリズム社会かもしれない。

公文 それを社会的に言うと、社会技術の突然変異が起こったわけです。これがいろいろな新しい動きや形を生み出すが、それらすべてが淘汰を経ていく過程で消えてしまうのか、さらに進化して何かが残って新しい秩序として定着するのか、まだ何とも言えない。

東 伊藤穰一氏は、ブログ(blog)というアーキテクチャから参加型民主主義が創発してくるという。なるほどそうかもしれません。しかし、民主主義も創発するけれど、他のものもたくさん創発するわけです。だとすれば、別にそれは昔と変わらないのではないか。ネットやブログが登場する前も、民主主義的な秩序ができるころにはできたし、できないところにはできなかった。

石橋 民主主義も出現するし他のものも出現する。だから民主主義を特別扱いする必要がないというのは、そ

のとおりです。スマートモブズのようなものが出てきたことによって、今までと社会の動き方が根本的に変わってしまって、いろいろなものが構造的に変革を迫られるのかどうかということを検討しなくてはならないと思います。その中で民主主義も変わるだろうし、同じように人気投票もどう変わるのかとか、マン・オブ・ザ・イヤーで田代まさしが一位になったとか(笑)、いろいろな話がありますが、何にでも効くからといって、今までと同じだと切り捨てるわけにもいかないと思います。

公文 自己組織化と学習はまだ始まったばかりで、マン・オブ・ザ・イヤーで田代まさしが出たという経験を一度多くの人がすると、次の行動が変わってくるかもしれない。同じような呼びかけにすぐ応えるかということ、ワンクッション入るかもしれない。そういうことが何百回、何千回と起こっているうちにまた何が創発してくるのかということ、そう簡単にはわからない。しかし、後戻りはしないだろう。少なくとも、携帯がなくなるということはあり得ないでしょう。

東 それはもちろんです。僕が言いたいのは、単に、情報技術がいくら進んで大衆化しても、それを使いこなしてクリエイティブな自己表現や政治運動ができる人間がとても少ないことは変わらないだろう、ということですよ。

公文 「クリエイティブ」ということの定義の問題だろうと思いますが、個人のレベルでいえば、たぶん東さんのいうとおりでしょう。

東 わかりやすく言えば、突発オフがいくらあっても、やはり楽しいだけでしょう。そういう楽しさを「クリエイション」というのなら、それはそれでスマートモブズは創造性を高めると言えるのかもしれませんが、公文先生のおっしゃっている変化にはもう少し別の力が必要になるのではないですか。

■スマートモブズとクリエイティビティ

公文　そこです。いま東さんがクリエイティビティと言っていることと、1950年代、60年代のテクノクラートとして突出してきたときにその人たちが持っていた性質とか、あるいは80年代のギークと呼ばれた若者や子供たちが持っていた性質が同じかと言うと、僕は違うのではないかという気がする。テクノクラートとかギークというのはむしろ社会的な現象であって、芸術とか科学のクリエイティビティとは全然違うとは言わないけれど、おそらく性質の違うものであって、テクノクラートとして一番成功した人が東さんの意味で非常にクリエイティブな人かと言うとおそらく違うだろう。しかし彼らは、社会の新しい運営のあり方を創り出したとは言えると思います。

東　前回、石橋さんは、オタクの話をしたときこういうことをおっしゃいましたね。つまり、サブカルチャー的で先端的な現象がたくさんあっても、主流で受け入れられるのは少数で、それはそれでかまわないと。その返答をそのままここでも返せると思います。確かにスマートモブズ化でおもしろい現象は局所的に起こるでしょう。しかし、全体に波及していくとなれば、どうでしょう。たとえば2ちゃんねるにしても、コテハン(固定ハンドルネーム)が数十人集まって作っているような狭いコミュニティでは、従来起きていなかったようなコミュニケーションが生じている可能性はある。それは認めます。しかし、マスで見たときのスマートモブズ化の効果というのは意外と単純で、ダイレクトマーケティングがよくできるようになりましたとか、電車の時刻表が見れてみんな終電に乗り遅れないようになりましたとか、そういうレベルに落ち着いてしまうような気がするんです。

石橋　僕のイメージは、たとえば今のテクノロジー、環境、社会状況だと5人クリエイティブな人が集まらないとできないことが、有象無象が100人集まるとできる

ようになる。

東　それはどうでしょうか。

公文　それは、事柄によるのではないですか。

東　情報技術は、コミュニケーションのコストは下げた。しかし内容のコストを下げたわけではない。だから、情報技術が可能にしたのは、コミュニケーションの量は爆発的に多くなるけれど、それを埋めるほど内容が付いてこない、という状況です。結果としていまの日本では、チャットやケータイにおいては、内容よりもコミュニケーションの事実性のほうが重視されるようなモードが一般化している。宮台真司(東京都立大学助教授)たちが指摘するように。わかりやすく言えば、とにかく話していること、繋がっていることが重要で、通信内容はどうでもよいわけです。それがスマートモブズの……というか、少なくとも日本型のスマートモブズのコミュニケーションの特徴です。だから、コミュニケーションの量が大众的に爆発的に増加したからといって、どんどん新しいクリエイションが出てくるとはどうしても思いがたい。

石橋　普通だったら有象無象が100人集まるよりは、5人で集中してやったほうがクリエイティブなことができる状況というのはたくさんありますね。僕のイメージでは、2人のクリエイティブな人を頂点にして有象無象を含めたモブズがいると、5人と同じようなことができるかもしれないという気がします。

東　うーん。これはたがいのバックグラウンドの違いのせいかもしれませんね。確かに理系や工学系の論文執筆などでは、多くの人コメントやフィードバックが重要な役割を果たすでしょうし、そこで量の多さが質に転化するかもしれない。しかし、人文系や社会科学系の論文では難しいでしょうね。さらに、政治的決定となると、それは単にポピュリズムしか生まないのではないかと

ずれにせよ、ロスが多すぎるような気がする。

公文 それ自体には賛成です。思わぬ方向で良くなったというのが1回あれば、思わぬ方向で悪くなったというのが100回ぐらいあって、かなわんよという話なのかな。でも何かが、たとえばこれまでの個人主義的政治の世界では“ポピュリズム”と否定的な意味合いをこめて言われてきたことの中身が、これからは変わってくるということもありうるのではないか。

東 とりあえず、僕はいまのところ、匿名の100人の情報が集まったことによって自分の論文の質が上がったというような経験はないですね。そういうことが可能であれば、ぜひ挑戦してみたいけど。

石橋 その分野では僕も似たような印象を持っていて、創造的なものづくり、知識を集約したり、編集したり、吟味したりして純度の高いもの、たとえばアニメーションや論文を一つ作るといった作業においては、あまり役に立たないということはあると思います。

ただコンテンツ産業でもいろいろあって、セルに色を塗っている人もいます。でも、この人はクリエイティブじゃないのかということそうではない。

東 それはスマートモブズ化よりモジュール化の問題ですが、たとえばアニメの制作過程で、色ごとに完全にモジュール化して、ネット上で「赤の色を塗れるヒマなコンピュータ」あるいは「ヒマなひと」を探して自動的に作業させるというような、SETI@homeのアニメ版みたいなものはやればできるのかもしれない。でも、これはもはや検索エンジンみたいなものですね。これやりたい人はこの指とまれみたいな。これは作品の質の本質的な変化をもたらすでしょうか。よくわかりません。

石橋 本質的な変化が何を指すかにもよるのですが、少なくとも今までこういうものを作りたいなという意識

を持った人がいたとしても、作る手段がなかったものが、ものを作ったり事を起こしたりということができるようになる。それが量的な変化なのか質的な変化なのかというのが、たぶんもう一つの議論だと思います。

■コミュニケーションの質の低下

東 コミュニケーションの「ネタ」としては、さまざまなことが考えられるわけです。同じアニメが好きでもいいし、同じ政治家が嫌いでもいいわけで、このレベルでは社会運動もオタクもみな同じです。そして、インターネットは、何かひとつのことを「ネタ」にして大量の人や情報を結集させる力は突出していると思います。その変化は確かに重要です。しかし、私たちはいまやそこから先を問題にしなければならないのではないのでしょうか。

公文 e-JAPAN戦略みたいな話ですね。インフラはできた、どう活用するのかと。

東 何かの「ネタ」について情報を集めたいと思ったら、ネットではすぐ集まる。それは確かです。でも取捨選択の難しさはあまり変わらない。さきほども言いましたが、いまやコミュニケーションの内容よりも事実性のほうが重視されている。つまり、どの掲示板でも、書き込むことそのものが目的になっている人がけっこう多いわけです。仲間内の名声が情報の質を保証するといったモデルがよく語られますが、そんなモデルが、まったくとネタの応酬をしている日本の掲示板にどれほど当てはまるかは疑問です。

これは原理的にはこういうことだと思うんです。情報技術は確かにコミュニケーションのコストを安くした。しかし、人々は、そこで浮いたコストを内容の充実に振り分けるわけではなかった。ここが問題です。そもそも、情報技術の発展によって人間の創造性が上がるという議論は、コミュニケーションのコストが低くなれば内容の充実にコストをかけるはずだ、という考えを前提として

いたように思います。しかし、実際にネットや携帯電話の大衆化によって生じたのは、通信費が安くなったから内容にコストをかけよう、ではなくて、通信費が安くなったからできるだけ多くの人と長時間コミュニケーションをとろう、ということだった。その結果、いまや、1回1回の通信の内容には、むしろ昔より低いコストしかかけられなくなっている。メールも携帯もせわしないから、内容なんて吟味してられない。だから、コミュニケーションの量は増えるけれど、内容はむしろ画一化・パッケージ化する。それもスマートモブズ化の一面だと思います。これはずいぶんと否定的な意見ですが、そういう部分も見ておかなきゃいけないと思うんです。

石橋 僕の実感も同じです。それに対する僕の説明は、たとえば世の中には言いたいことがいろいろあって、その品質が右下がりの曲線で表されたとしますね。このとき、コミュニケーションコストが出したい内容の価値を上回ってしまったら意味がないので、コミュニケーションコストが高いときは、あまりくだらないことは言わないわけです。それが低くなり、今まではコミュニケーションコストが高すぎて出なかった情報も、全部出るようになって、1件あたりの価値は下がったということだろうと思います。

東 だからこそ、政権打倒に使えるテクノロジーが、オールスター投票のパロディに使われちゃうわけですね。

公文 それこそ、ラインゴールド自身が繰り返し指摘していることでもあります。スマートモブ技術に限らないだろうけれど、ここには大きな自由度があります。それに制約を加えて、これまでにはなかったような新しい意味のある形というか秩序を創り出していくのが、一方では“自然淘汰”であり、他方ではわれわれの“主体的選択”なのだろうと思います。たとえば、そこにいずれは生まれてくる政治秩序は、“〇〇民主主義”といったカテゴリーには収まりきらないもっと異質のものではない

かという予感が、私にはあります。

石橋 今回はスマートモブズの評価をめぐって、興味深い議論ができました。一方でスマートモブズ的な動きによって、これまでとは異なる次元の創発的な活動が出現してくるという予想があり、もう一方では特にクリエイティビティという観点ではこれまでとは本質的に変わらないだろうという予想が出ました。これについては、より議論を深めていく必要がありそうです。次回は、スマートモブズの創発性について、より詳しく公文先生にうかがう予定です。

(2003年6月24日GLOCOMにて収録)